

## 64 仮定法原形

英語では、主張や提案を表わす動詞・名詞・形容詞が導く *that* 節の中で、動詞の原形がよく用いられる。(1b) のように命令的な意味があれば、3 人称単数の主語に対して、3 単現の *-s* が動詞から欠落できるのである。

(1) a. I know that the student goes/\*go to school regularly.

b. I demand that the student go to school regularly.

この構文は一般に**仮定法現在 (present subjunctive)**と呼ばれ、古英語では仮定法現在独自の動詞形態が存在していたが、本稿では渡辺 (1989) にならって「**仮定法原形 (bare subjunctive)**」と称することとする。

仮定法原形は、細江 (1973), Chiba (1987), Nomura (2006), 千葉 (2013) に詳細な研究があるが、ここで簡潔に記述すると4つの主な特徴がある (Murakami 1992: Ch. 1, 2019)。第1に、例えば (1b) の主節を過去時制にしても、(2a) のように仮定法原形は時制の一致をしない。(2b) でも命令的な意味を伝えられるが、(2b) の語形 *went* は直説法過去時制であり仮定法原形ではない。

(2) a. I demanded that the student go to school regularly.

b. I demanded that the student went to school regularly.

仮定法の *be* に対しては、仮定法過去の *were* に時制の一致をしそうであるが、(3b) が示すようにこの予想は正しくない。

(3) a. The boss urges that the meeting be postponed.

b. The boss urged that the meeting be/\*were postponed.

第2の特徴は、助動詞 *do* が挿入されないことである。Bolinger (1977: 189) は、*do* を入れた (4) を ‘*emphatic orders*’ として掲げていたが、筆者のインフォーマントによれば非文である。原形といえども、助動詞 *do* は I 位置には入れない。

(4) a. I insist that he (\*do) take the medicine.

b. I insist that she (\*do) not take the medicine.

主語が3 人称単数でなければ、助動詞 *do* を用いた (5) も可能である。

(5) a. It is important that you do follow your doctor’s advice.

b. People recommend that I do not go there alone.

しかしながら (5) の *that* 節は、助動詞 *do* が常に定形であり時制を支えるとすれば、これまた仮定法原形とは言えず直説法現在時制なのである。本動詞 *do* の場合は、もちろん問題なく仮定法原形をとることができる。

(6) Her doctor advised that she do more exercises.

第3の特徴は、be動詞の否定文の語順である。直説法ではI am not, you are not等のように否定辞はbe動詞の後に来るが、仮定法原形では語順がbe notではなくnot beになる。仮定法原形は伝統的に定形であると見なされてきたけれども、**定形性 (finiteness)** が弱いと思われるゆえんである。

(7) a. I suggest that you {not be/\*be not} too generous.

b. He agreed to publish his opinion on the condition that he {not be/\*be not} named.

最後に第4の特徴は、直説法のthatとは違って、仮定法原形節では**補文標識 that (complementizer that)** を省略しにくいことである(千葉 1995)。ただしこれは時代や方言差や個人差、仮定法を導く語句によっても差異が認められる。Murakami (1992: 11) のささやかな調査では、次のような段階を持つ文法性が見られた。

(8) a. I insisted that / $\phi$  he take the medicine.

b. I recommend that / ? $\phi$  he take the medicine.

c. It is necessary that / ?\* $\phi$  he take the medicine.

d. I asked that / \* $\phi$  he take the medicine.

以上が現代英語における仮定法原形の特徴であるが、歴史的にはこの構文は大きな変貌を遂げている。仮定法は古くは使用範囲が広く、命令の意味がないafter, before, if, though, till, unless, whether等、多くの従属節で用いられていた。以下、千葉 (2013: 148) が引く欽定訳聖書 (1611) の例を挙げる。

(9) a. Though he fall, he shall not be utterly cast down. (*KJV*, Psalms 37:24)

b. And Samuel said unto Jesse, Send and fetch him: for we will not sit down till he come hither. (*KJV*, I Samuel 16:11)

また、古い英語ではbe notが正しい語順であり、(10b) のように本動詞さえnotの前に出ていた。Visser (1966: 837, 829) の収録した例を挙げる。

(10) a. Pray god  $\phi$  he be not angry.

(Shakespeare (1613) *King Henry VIII*, II.ii.63)

b. Beware thou that thou bring not my son thither again. (*KJV*, Genesis 24:6)

これらの例は、仮定法でも古くは**動詞上昇 (verb raising)** していた証左である。しかも語順がbe notの時代は、(10a) のように補文標識thatが現代よりも頻繁に省略されていた (Murakami 2000)。概して歴史的変化は、直説法よりも仮定法において劇的であったと言えるであろう。

(村上 まどか)